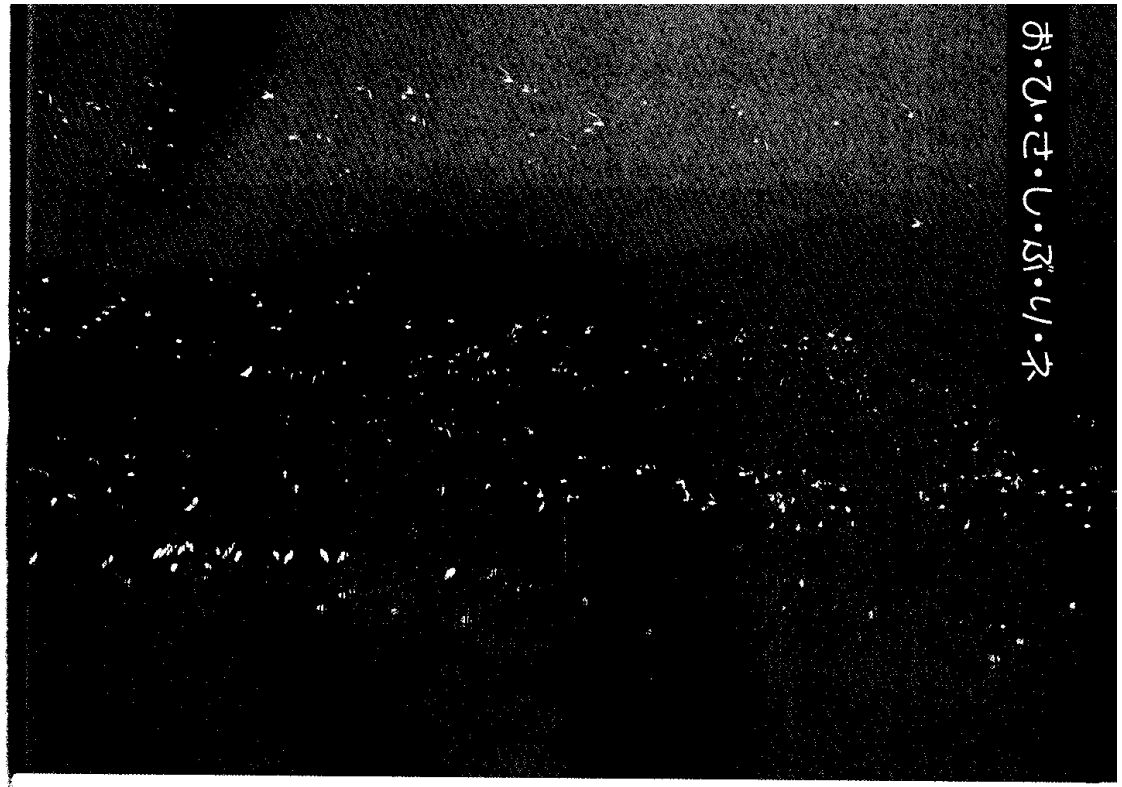


あ・ひ・さ・し・ぶ・り・ネ

びわ湖は渡り鳥の楽園!?

びわ湖であそぶ水鳥は、湖北が第二のふるさとだ。北の大地で生まれた鳥たちは、秋から春まで半年のあいだ、湖北で過ごす。

カモの仲間、オオヒシクイ、コハクチョウ……

湖北には、びわ湖にくる渡り鳥の半分以上が住む。みんなびわ湖の北がお気に入りだ。波は静かで工サは豊富、ヨシもあって水もきれい。

永久凍土のさいはてから、何千キロも、ひたすら湖北だけをめざしてやってくる。しかも、毎年同じ家族で。『ニルスの大冒険』に出てくるラップランドのように、湖北はワクワクするあこがれの地なんだ。

秋、シベリアから渡ってくる雁は、流木に止まって長旅の疲れをいやす。そしてその流木を一本一本、津軽の浜に置いて南へ向かう。

春が来て、北へ渡る鳥たちは、津軽の浜で再びその流木を拾っていく。そして浜には、北へ帰れなかった鳥の数だけ流木が残る。津軽の人々は、春を迎えられなかった鳥を想い、木を拾い集めて風呂を沸かすのだという。

津軽ではこれを『雁風呂』という。

水鳥は、短い生命を渡りで燃焼させる。

だから、びわ湖で水鳥に出会ったら、

「ようお帰りやす」と声をかけてあげよう。ふるさと湖北のかわいい仲間なんだから。

冬の湖北には数万羽が飛来

オオバン、カイツブリ、カルガモといえば、湖北でも年中見られる水鳥として親しまれています。その三つの顔のアップが、『澄んでいるから住みやすい』というコピーとともに、滋賀県の広報ポスターに登場。そばでじっくり見てみると、鳥なりにそれぞれの個性があって、つい微笑んでしまいます。

十月に入ると、びわ湖岸や池などにさまざまな水鳥たちが飛来し、湖北に住むわたしたちに冬の訪れの近いことを知らせます。

遠い遠い凍土の地から、びわ湖をめざして飛んできた鳥たちは、ここを安住の場として、わたしたちといっしょに湖北の冬を過ごすのです。

水鳥公園となっている湖北町の湖岸は、沖合約五百mまで水深二、三mという遠浅な地形です。また、冬の季節風の影響を受けにくい比較的穏やかな水域なので、かなり大きなヨシ群落が残っています。そのため、冬を湖北ですごす水鳥にとって、この辺りは絶好の安息地となっています。

湖岸のヨシ群落は、カイツブリ、オオヨシキリ、オオバンなどの繁殖の場になり、カルガモ、スズメ、ツバメ、ムクドリなどのねぐらにもなっています。餌が豊富で、安心できる場所が、鳥たちの憩いの場になるのです。

冬のびわ湖へ渡来する水鳥のなかでも、ガンカモ目が大部分を占めています。その数は約五、六万羽。湖北のびわ湖岸には三〜四万羽が渡来します。野鳥センター辺りだけでも二十余種が数えられていますが、これは全国で四位に相当します。

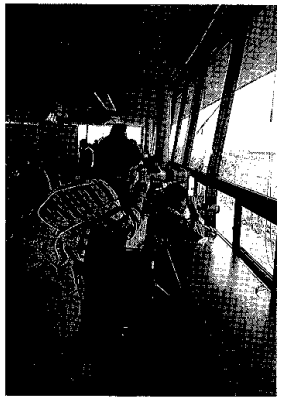
また、湖北はコハクチョウとオオヒシクイがいっしょに見られる、西日本では唯一の地域です。

水鳥に会いに出かけよう

あなたも図鑑と双眼鏡を持って、水鳥たちに会いに出かけませんか。

湖北には、西池（浅井町池奥）や三島池（山東町池下）という水鳥のサンクチュアリがあります。ここで一年中を過ごす鳥たちもいますが、渡り鳥がたくさん飛んでくる冬の池は、とてもにぎやかです。

昼間、波に漂って遊んでいるように見える水鳥は、実は睡眠をとっているところです。ここで見られる鳥たちも、夜になるとそれぞれ約九キロ、十七キロも離れたびわ湖や、近くの水田へ採餌のために飛んで行きます。動きのある水鳥の姿を見たかったら、早朝がいいでしょう。



▶湖北野鳥センターには、十台のフィールドスコープなどが設置されていて、びわ湖の水鳥たちがゆっく

また、びわ湖岸の湖北野鳥センター（湖北町今西）では、毎月第三日曜日に定例観察会が催されています。これに参加すれば、指導員の方からいろいろなお話が聞け、水鳥への親しみがいっそう深まるでしょう。

渡りの謎

こうして湖北で冬を過ごした鳥たちも、やがて春の訪れとともに、北の国へと帰っていきます。そして入れ代わりに、夏鳥と言われる鳥たちが、南の国から渡ってくるのです。

しかし、渡りの途中で力尽きてしまうもの、タカなどの襲撃にあうもの、餌が充分にとれないものなど、たくさんの犠牲がでます。

どうしてこんな危険を冒してまでも、鳥たちは渡りをするのでしょう。昔西洋では「ガンやカモは月の世界に帰って行くのだ」とか、「鳥のなかには、冬になると別の鳥に変身するものがある」と信じられていたといいます。

鳥の本能的な習性だと考えられるようですが、渡りについての研究が科学的に行われるようになったのは近代になってからで、どうして渡るのか、どのようなコースをとるのかなど、その実態はまだ解明されていないことが多いようです。

カワウと竹生島の不思議な関係にせまる…

▲枯れた木々の周りを群舞するカワウ

◀カワウ

▲緑でおおわれた竹生島の一角は灰色に……

みずすまし号でコロニー偵察

カワウが異常繁殖して、竹生島の緑が危ない。今年の春、そんなニュースが新聞に載った。そもそも、緑と鳥というのは共生関係にあるものだ。緑は鳥にエサを与え、巣づくりを助けて住みかを提供する。鳥は緑の種子を運んで森の成長を助ける。

緑をつぶしていく動物は、人間だけだと思っていたら、「へえ、カワウもね」なのだった。ヒッチコックの『鳥』という映画に、鳥の群れが空一面を覆う不気味な場面が出てくる。詳しいストーリーは忘れたが、自然に対する人間の独善が鳥たちの反乱を招き、人間を追い詰めていったのだと思う。

カワウと竹生島の不思議な関係にも、ひょっとしてそういう人間の独善が潜んでいるのではないだろうか。ナチュラリストのみーな取材班としては、これはぜひ究明しなければならない。というわけで、さっそく調査を開始することになった。

まずは、長浜市の生活環境課が行っている「環境塾」の現地研修に便乗させてもらって、県の調査船「みずすまし号」で竹生島の現地を見に行くことになった。

観光船が発着する港は、竹生島の南東にある。湖北から眺める島の様子も、南東の側だけしかわからない。カワウのコロニー（集団営巣地）は、その反対側の急斜面にある。だから、容易に人が近づけないし、普段は見ることができない。

みずすまし号は、島の南から時計まわりで北側の営巣地へ向かっていった。黒い鳥の群れが次第に多くなっていく。やがて、深い緑におおわれた島の一角に、灰色に枯れた一面の林が現われてきた。船がエンジン音を響かせて近づいていくと、黒々としたカワウの群れが一斉に枯木から飛びたった。目を凝らすと、枯木のうえにも点々と無数の鳥がとまっている。

林立する枯木と群舞するカワウの情景は、ヒッチコックの『鳥』を連想させる不気味なふんいきだ。枯れた木々の下は、灰色の地面が透けて見える。カワウの糞で草も生えていない。糞の害で緑が枯れてしまうわけだ。枯れた森の面積は、島全体の三分の一ぐらいはあるだろう。それがだんだん広がってきているという。森がなくなれば、島は雨や風の浸食作用で次第に姿を変えていくことになる。竹生島の落雁は絵になるが、落カワウは絵にならない。

竹生島の巣は十年で百倍に

「ふーむ、これはえらいこっちゃ」

取材班は、鳥肌を立てながらつぶやいた。鳥を見て鳥肌を立てるのは健康によくない。というわけで、次に訪れたのが滋賀県庁の自然保護課。

「わたしたちは、カワウの糞害に憤慨しているんです！」

みーな取材班は、カワウが竹生島でやりたい放題やっている現状を担当者に伝えた。

「去年は目玉風船を付けたんですが、効果がなかった。それで今年の春に巣落としをやってみた。しかし、いまのところカワウの数は減っていない」

担当者も弱りきっている様子だ。

「カワウがエリに入るとか、稚アユをちょろまかすという被害も出ているようですが。首に縄かけてしょっぴくとか、何とかならないもんでしょうか」

「竹生島は鳥獣保護の特別保護地区に指定されているもんですから、鉄砲で射つわけにもいかないしね」

「だいたい、あのヒョロ長くて黒いカワウの顔には、鳥のデリカシーというもんが感じられん。湖と緑の美しい景色を何と思っているんでしょう！」

「何とも思っていないでしょう。だいたいよそ者がほとんどですから」

「というと、彼らはどこから来たのですか」

「知多半島に大きなコロニーがありましてね。最初は、エサ場を求めて日本海に行く途中で、たまたま寄ったんじゃないかと言われている」

「そうか、人はいないし、エサはびわ湖にたくさんある。絶好のコロニーですよね」

「竹生島では、昭和五十七年にはじめて五個の巣が発見された。それがいまでは五百あまり。しかも、いままでは巣づくりだけの場所だったんですが、最近は島をねぐらにしているヤツもいる」

びわ湖はカワウの最適コロニー

とにかく、県もいまのところ打つ手なしという状態だ。

そもそも日本列島改造の時代は、カワウは絶滅種になっていたのだという。それが、最近急に増えだした。竹生島も、もとはサギのコロニーだったが、カワウがサギを追い出して占拠してしまったのだという。

彼らは、一日に五十キロくらいは軽く飛べるそうだ。だから、最適のコロニーやねぐらが見つかれば、いくらでも余所から飛んでくる。現在、びわ湖をねぐらにするカワウはおよそ三千羽。コロニーは近江八幡の伊崎にもある。カワウのコロニーやねぐらになっていた森の開発で、人の手の届かないびわ湖に移ってきたのだろう。

カワウはクサイ鳥だという。ドンクサイのではなくて、臭いがたまらないのだ。天敵になりそうな動物もカワウを見ると、「クッサー」と鼻をつまんで逃げていってしまうらしい。しかし臭いや姿だけで鳥を判断してはいけない。カワウにも〝鳥権〟というものがある。

考えてみれば、びわ湖にこれだけカワウが増えてきたのは、余所に比べて、まだびわ湖の自然が保たれていることの証になるのかもしれない。竹生島の代わりに、カワウに最適のコロニーを提供してやって、人とびわ湖とカワウがうまく共存していくというのが、いちばんの解決策なのだろう。